岩国をつなぐ未来へつむぐ



© 弘兼憲史／講談社

岩国高等学校同窓会東京支部
令和8年　vol.2

特集

岩国高等学校同窓会東京支部70周年記念

宇野千代と岩国

構成・文　二藤 正和



©株式会社宇野千代

70周年70回目の総会によせて

岩国高校同窓会東京支部は、今年70周年の記念の年にあたり、第70回目の総会を開催いたします。戦後80余年で東京において70周年を迎えるということは、さすが歴史ある岩国高校ならではと、大変誇らしい思いがいたします。この70年の道のりは、皆さまの『母校を想う気持ち』や『つながりを大切にする姿勢』によって支えられてきたものです。平素より同窓会活動にご理解とご協力を賜っておりますこと、心より御礼申し上げます。

このたび、70周年記念号として会報誌Vol.2を発行いたしました。岩国高等女学校大正3年卒業の宇野千代さんの巻頭特集をはじめ、平成12年卒業のサッカー元日本代表・岩政大樹さんら各界で活躍する同窓生へのインタビューを中心に掲載しています。これはVol.1同様、同窓会岩国本部および山口・広島・関西各支部総会、更には岩国高校在校生全員に配布する予定です。

本誌制作におきましては、皆さまからの多大なる寄付金・広告協賛金を賜ることで実現することができました。重ねて御礼申し上げますとともに、今後の運営費としても有効に活用して参ります。

岩国高校の同窓生として、東京だからこそできる役目があると思っております。昨今では社会の変化も大きく、同窓会を取り巻く環境も変わりつつありますが、東京支部としてこれまで培ってきた絆をさらに深め、今後の活動につなげていく所存です。今後とも、東京支部の活動への変わらぬご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

令和8年10月17日

山口県立岩国高等学校同窓会 東京支部　支部長　仲村 映美

目次

1 巻頭特集
『宇野千代と岩国』
二藤 正和さん（クリエイティブディレクター）

8 Iwako OB Interview
岩政 大樹さん（サッカー指導者）

12 Iwako OG Interview
三木 恵美子さん（弁護士）

16 Iwako OB Interview
林 卓史さん（慶應義塾大学教授・野球指導者）

20 Iwako OB & OG Interview
平成19年卒業の仲間たち

24 Iwako OG Interview
住田 愛子さん（歌手）

27 寄稿
「百科辞典を作った斎藤精輔と彼を助けた岩国人」
佐古 利南さん（教育者／著述家）

33 寄付者ご芳名・協賛広告

表紙イラストは、岩国市出身の漫画家・弘兼憲史さんの『島耕作』シリーズよりご提供いただきました。彩色は、元スタジオジブリでCG監督として活躍した片邉満則さん（昭和58年卒）。70周年記念会報誌のスペシャルコラボ企画です。

イラスト●弘兼憲史
彩色●片邉満則（昭58年卒）
題字●岩見屋錦舟（昭41年卒）

企画制作●仲村映美（昭和58年卒）
二藤正和（昭和58年卒）
協力●貴舩和也（平成16年卒）

編集●仲田舞衣
デザイン●sukodesign／須子まゆみ（卒）

発行●岩国高等学校同窓会東京支部
〒107-0052
東京都港区赤坂4-4-18-501
Tel.080-4200-0808
info@iwakuni-hs-tokyo.com
https://www.iwako-t.com

2026年10月17日発行　vol.2

※本誌掲載の記事・写真の無断転載・複写を禁じます。

十八歳で、岩国を後にした。
恋をして、迷って、また恋をして。
でも、書くことだけは、手放さなかった。
心の動く方へ、人生を重ねてきた。
気がつけば、宇野千代は、
宇野千代になっていた。



出て行きたかった岩国
帰りたかった岩国

故郷とは、不思議なものである。
そこにいるときには、早く出ていきたいと思う。しかし、遠く離れて初めて、当たり前だった風景が自分をつくった大切なものであったことに気づく。宇野千代にとって、岩国とは、まさにそのような場所だったのではないだろうか。

明治三十年（一八九七年）、宇野千代は岩国の川西に生まれた。家から少し歩けば錦川があり、その奥に城山がある。川には錦帯橋が架かり、春には桜が土手を埋め尽くす。子どもの頃の千代も、私たち同窓生と同じようにその風景を見て大きくなったのだ。二歳で実母を亡くし、父と義母のもとで育った。義母は優しかったが、父はある種の奇人だったという。家には勝手な秩序があり、娘には父の思う通りの生き方が求められた。しかし、千代の心には、その枠には収まりきらないものが芽生えていた。文学である。雑誌を読み、文章を書き、投稿する。岩国高等女学校、現在の岩国高等学校では成績優秀で、校友会雑誌にもその文才をうかがわ



ずいぶん遠くまで歩いてきた。
たくさんの人に出会い、恋をし、書いた。
それでも、心を離れなかったものがある。
錦帯橋と、桜と、生まれた家と。
故郷、岩国は、ずっと
宇野千代のなかにあった。

せる文章を残している。まだ何者でもない少女の胸のなかに、ここではないどこかへ行こうとする力が生まれていた。私たちの母校の教室に、すでに作家宇野千代の小さな芽はあったのである。

卒業後、十七歳で川下村小学校の代用教員となる。しかし、同じ学校に勤める教師との恋が、その人生を大きく変える。後年、「熱病のような恋」と振り返ったその恋は、恋文を生徒に届けさせたことから大騒動となり、千代は学校を去ることになった。十八歳。彼女は岩国を離れる。それは、美しい旅立ちというより、脱出に近かったのかもしれない。故郷の視線からの、決められた生き方からの、昨日までの自分からの、逃亡。人目を避けるように新港へ向かい、船で岩国を発った。そのとき、見送りに来た義母と交わした言葉が残っている。「お母、そいじゃ行くけえの」。「風邪をお引きなよ」。ただ、それだけだった。行くな、とも言わない。いつ帰るのか、とも聞かない。ただ、娘の身体を案じる。その義母の言葉を胸に、十八歳の千代はひとり故郷を離れた。

朝鮮半島へ渡り、京都へ、東京へ、そして北海道へ。東京では雑誌社の

事務、家庭教師、レストランの女店員など、さまざまな仕事に就いた。まだ小説家ではない。名声もない。お金もない。あるのは、書きたいという思いだけだった。東京という街は、何者にでもなれる街。そして、自分がまだ何者でもないことを思い知らされる街。岩国高等女学校を出たひとりの女性も、その片隅で働き、人と出会い、文章を書いた。レストラン「燕楽軒」で働いたのは、わずか十八日だったという。その短い間にも、芥川龍之介、今東光、久米正雄、そして「中央公論」の滝田樗陰らと出会った。人生の入口は、どこにあるかわからない。千代は、最初から道を知っていたわけではない。歩いたところが、道になったのである。


宇野千代 著
『おはん』（新潮文庫刊）

『生きて行く私』宇野千代
KADOKAWA／角川文庫

大正十年（一九二一年）二十四歳。『脂粉の顔』が時事新報の懸賞小説で一等に入選する。そして翌年、「中央公論」に発表した『墓を発く』によって、初めて三百六十六円の原稿料を得た。誰かに与えられたものではない。家からの支援もない。自分の才能と仕事だけで得た三百六十六円だった。その大金を東京で手にし、千代が真っ先に向かったのは、夫の待つ北海道ではなく、六年ぶりの岩国だった。駅には家族が迎えに来てくれた。人力車を連ね、大明小路に入り、半月庵の前を通り、錦帯橋を右手に見ながら土手を進み、臥龍橋を渡って川西の生家へ向かった。六年前、人目を避けるように故郷を出た少女が、自分の仕事で得たお金を懐に、同じ道を帰ってくる。錦帯橋はずっと変わらないけれど、橋を見る千代は、もう六年前の千代ではない。故郷に錦を飾る、という言葉がある。だが、このときの千代は、まだ大作家ではない。持ち帰ったものは、錦ではなかった。「私は、私の力で生きて行く」。その覚悟だけだったのではないだろうか。

恋も、小説も、ビジネスも人生はいつも心の動く方へ

六年ぶりの帰郷を終えた千代は、再び東京へ向かった。中央公論社に立ち寄り、後に夫となる尾崎士郎と出会う。札幌へ戻るはずだった汽車には、乗らなかった。『生きて行く私』には、そのときのことが、いかにも宇野千代らしく記されている。「北海道へ帰る時間は、もうとうに過ぎていた」。予定された人生から、次の人生へ。千代は、ためらうより、先に動いた。その後もそうだった。小説を書き、雑誌をつくり、出版に挑み、着物をデザインし、事業を起こした。恋をし、別れ、また恋をした。一つの場所、一つの仕事、一つの価値観に、自分を閉じ込めなかった。

『色ざんげ』『おはん』『刺す』など、後世に残る作品を生み出し、作家としての確かな地位を築いていく。けれど、宇野千代の魅力は、成功したことだけにあるのではない。失敗もした。仕事につまずいた。人との別れもあった。それでも、失敗を人生の結論にしなかった。過ぎたことに囚われるより、次に心が動く方へ向かう。昨日までの自分を惜しまず、今日の自分を始める。「生きるとは動くことである」。千代のこの言葉は、彼女自身が九十八年をかけて証明した、千代の生き方そのものだったのだ。



もちろん、私たち同窓生にも、それぞれに岩国を旅立った日がある。進学のため、仕事のため、もっと大きな世界を見てみたいという思いのため。初めて東京駅に降り立った日の恐ろしいほどの人の多さ。複雑な電車の路線。見上げたビルの高さ。誰も自分を知らないという心細さと、それと同じくらいの自由。そして胸の奥には、ひそかな野心があった。ここ東京で何かを成し遂げたい。自分がどこまで行けるのか、試してみたい。野心とは、人を押しのけることではない。まだ見たことのない自分に会いにいく力である。宇野千代は、その力を、生涯失わなかった。

遠くへ行けば行くほど故郷は近くなって行く

東京で時代の先端を走り続けた千代だったが、年齢を重ねるにつれ、岩国への思いは強くなっていった。後年、千代自身がこう語っている。若い日の自分は、「私はこの町から逃げ出して行ったんです」。ところが、都会で暮らすうち、「田舎が恋しくなって、帰りたいと思うことが度々ありました」と。故郷を離れた歳月が、岩国への思いを少しずつ変えていったのである。文学のなかにも、故郷の記憶が息づいている。川がある。橋がある。山がある。なかでも錦帯橋と桜は、千代にとって特別な存在だった。知人に宛てた手紙には、錦帯橋を「日本中に自慢しても自慢しきれないほどの大切な橋」と記している。考えてみれば、錦帯橋は、どこか宇野千代の人生にも似ている。大雨で流されても、また架ける。失われても、もう一度立ち上がる。千代もまた、人生の節目ごとに自分をつくり直した人だった。

晩年、千代は傷んでいた川西の生家を修復し、それからは年に何度も岩国へ足を運ぶようになる。そして、故郷の人々に受け入れてもらえないと思い続けてきたことも、自分の「一人相撲」だったのではないかと気づく。岩国が自分を拒んでいたのではなく、自分の方が故郷を拒んでいたのではないか、と。昭和五十九年（一九八四年）、八十六歳。岩国で開かれた講演で、千代は故郷の人々を前にこう語った。「岩国の皆様、私の今までして来たおかしなことを許してください」。そして最後を、こんな言葉で締めくくった。「錦帯橋も桜も日本一です。私は日本一の故郷を持った日本一の幸福な者です」。若き日に逃げるように離れた場所を、「日本一の故郷」と呼んだ。その言葉に至るまでに、どれほどの時間が流れたことだろう。若い頃には、故郷は遠く感じられることがある。けれど、時を重ねるうちに、その距離は不思議なほど縮まっていく。錦川の水の色。城山の緑。錦帯橋を渡るときの板の感触。春の土手を埋める桜。耳に馴染んだ岩国の方言。家族や友人の笑顔。東京の雑踏のなかで、ふいにそれらが蘇る。そして気づく。故郷は、遠くにあるのではない。自分のなかにあるのだ、と。千代は、「故郷すなわち私である」と語った。



私たち同窓生も、それぞれの理由で岩国を離れ、それぞれの場所で懸命に生きている。会社を興した人もいる。組織のなかで仕事を成し遂げた人もいる。研究、教育、文化、芸術、スポーツの世界を極めた人もいる。自分の店を守り続ける人もいる。家庭を築き、次の世代へ繋いでいく人もいる。そして、これから新しい何かを始める人もいるだろう。そんな私たちにとって、宇野千代は、文学史やファッション史のなかの偉人であるだけではない。同じ岩国で育ち、同じ母校で学び、同じ故郷を出て、自分の人生を切り拓いた大先輩である。その九十八年の生涯は、一つのことを教えてくれる。人生に、年齢は関係ない。心が動けば、そこが新しい始まりになる。何かを始めるのに、遅すぎることはない。夢を追うのに、早すぎることもない。宇野千代は、生涯、「これから」を生きた人だった。故郷を愛するということは、故郷にとどまることだけではない。自分の選んだ場所で、自分の人生を精いっぱい生きること。それもまた、故郷への一つの恩返しなのだ。千代の九十八年の人生に耳を澄ませていると、こんな声が聞こえてくるような気がする。

「行きたいところへ、行きなさい。会いたい人に、会いなさい。やりたいことを、やりなさい。失敗したって、また始めればいい。幾つになったって、人生はこれから。元気をなくしたら、少しだけここに帰ってくればいい。今日も、錦川はそよそよと流れている。錦帯橋は力強く立っている。春になれば、桜もそこら中に咲き誇る。だから、あなたは、あなたの場所で、あなたの人生を思いきり咲かせなさい」と。

対談

宇野千代先生が、私たちの道を照らしてくれるもの


宇野千代生家にて

宇野千代顕彰会事務局長
安達尚子

宇野千代ドラマ観光推進実行委員会
統括ディレクター
二藤正和

二藤　まず、安達さんが宇野千代先生のことを知ったのはいつですか？

安達　高校生の時です。友人から「川西の奥に宇野千代さんという人の家がある」と聞いたのが最初でした。作品を読むようになったのは、少し後です。朗読会をきっかけに読んでみたら、とても面白くて、いろいろな作品を読むようになりました。

二藤　僕も東京の大学に進学した後に、当時ベストセラーだった『生きて行く私』を読みました。こんなにパワフルな生き方をされている方が、岩国高校の先輩にいることに驚きましたよ。当時の僕はなかなか自分の将来を思い描けず、でも、千代先生に背中を押してもらった気がします。

安達　その後、私は、平成4年に岩国で開かれた「宇野千代先生を祝う夕べ」に参加することになったんです。文化功労者と岩国市名誉市民になられたことを祝う会です。目の前に本物の宇野千代先生がいる。それだけでもう、うれしくて（笑）。

二藤　そうなんですね。安達さんは、長く千代先生に関わられてきて、いちばん魅力を感じたのはどんなところですか？

安達　やっぱり、前向きなところですね。千代先生はいろいろなことを経験されて、何度も人生を「生き直して」いる。だから言葉に真実味があるんです。私はよくなすごい先輩がいるんだよと、堂々と伝えていきたいですね。

二藤　そう思うと、千代先生は、時代の十歩も百歩も先を歩いていたんだと思います。言い換えれば、ようやく時代が追いついてきたんですね。最後に、もし今、目の前に千代先生がいらっしゃったら、何を伝えたいと思いますか？

安達　それはもう、「ありがとうございます」しかないですね。先生のおかげで、たくさんの人と出会い、いろいろなことを経験でき、人生がとても豊かになりました。そして、今でも私たちは、先生から生きて行く力をもらっています。ですから、「私たちも頑張るから、千代先生も応援してね」って言いたいですね。

二藤　千代先生なら、きっと、にっこり笑ってこう言うでしょうね。「あなたたち、まだまだこれからよ」って（笑）。

「どんな大変なことがあっても、千代先生のように立ち上がるのよ」と人に言うんですよ。

二藤　僕もそうですね。「一歩足を踏み出せばすべての行動が愉しくなる」とか、「冒険心・好奇心は生きる証し。どこまで行きつけるか見本になりたい」とか。先生の言葉から、幾つになっても新しいことに飛び込んでいける勇気をもらっています。

安達　私は、今でも先生の言葉を集めた本を持ち歩いているんですよ。その日の自分に必要な言葉を探すんです。たとえば、家のことと顕彰会のことが重なって、どこから手をつけていいかわからなくなった時には、「仕事はいっぺんに片付けようとするな。どんなにたくさんあるように見えても、一つずつこなせば全てが終わる」という言葉に助けられたりして（笑）。

二藤　そして、千代先生と言えば、連続テレビ小説「ブラッサム」（NHK）です。この機会に、若い人たちにも、もっと先生のことを知ってほしいですね。

安達　はい、今の若い人たちは、先生の生き方を「かっこいい」と言うんですよ。恋にも仕事にも一途で、どんな時も自分の気持ちに正直に生きてきた。そんな先生に対して、昔とはまったく受け止め方が違ってきています。私たちも、岩国にはこん

安達尚子／1972年（昭47）卒。
昭和47年卒、旧姓佐藤。平成9年に宇野千代顕彰会に入会。その活動は、宇野千代の功績を称え、末長く顕彰すること。現在は、事務局長として、薄桜忌、もみじ茶会、読書会などの行事をサポートする。

二藤正和／1983年（昭58）卒。
株式会社BRIDGE 代表取締役。クリエイティブディレクター、コピーライター。代表作は、サッポロビール「乾杯をもっとおいしく」、JAL「大谷翔平を起用したブランド広告」、岩国市「ちよ散歩」「つまんでちょんまげ」、長門市「センザキッチン」など。

書いた、恋した、生きた。宇野千代 女の一生

0歳　1897（明治30年）
山口県岩国市に誕生
6人兄弟の長女として生まれる



17歳　1914（大正3年）
17歳にして働き始める
小学校の代用教員としてキャリアをスタート



24歳　1921（大正10年）
24歳で初の小説が入選
作家・宇野千代のデビューは華々しく1等賞から始まった



25歳　1922（大正11年）
作家・尾崎士郎と出会い、上京
札幌に夫を残し、同棲開始。作家という職業に目覚める



33歳　1930（昭和5年）
画家・東郷青児との暮らし
卓越したモダンなセンスに深く感化される



38歳　1935（昭和10年）
代表作となる『色ざんげ』出版
濃厚な5年間の暮らしに別れを告げる作品を出版



39歳　1936（昭和11年）
時代をリードしたファッション誌『スタイル』創刊
編集長、起業家として新たな人生を踏み出す



42歳　1939（昭和14年）
作家・北原武夫と結婚
同業者同士のパートナーシップで仕事も全開



49歳　1946（昭和21年）
銀座に新社屋を設立
終戦を迎え、夫婦でスタイル社再興に乗り出す



50歳　1947（昭和22年）
50歳にして『おはん』連載に挑戦
ヒット作への希望をつなぎ50代を「おはん」に費やす



52歳　1949（昭和24年）
きものデザイナーとして大ブレイク
きものデザインを開始し、新しい仕事を手に入れた

54歳　1951（昭和26年）
初めての海外渡航を体験
戦後日本人女性作家として初の渡欧を果たす



60歳　1957（昭和32年）
『おはん』が文学賞を受賞
昭和文学の最高傑作を60歳にして生む



62歳　1959（昭和34年）
スタイル社倒産、5年後離婚
成功の裏に借金苦の生活最後の男との別れも経験



70歳　1967（昭和42年）
きものの仕事をまとめ執筆に専念
70歳から堰を切ったように秀作を連発



77歳　1974（昭和49年）
生家の修復
倒れかけた家を前に、千代が動く



86歳　1983（昭和58年）
ベストセラー『生きて行く私』を出版
あの代表作は85歳から！その精力的な活動に感動



88歳　1985（昭和60年）
宇野千代ブーム再来！
生命力にあふれた姿が憧れの存在へ



98歳　1995（平成7年）
98歳にしてなお出版
最後まで書き続け、人生を楽しんだ最後までさらによりよい小説を書こうとした



元サッカー日本代表

岩政大樹さん



Pain No Gain

Profile

1982年、周防大島町生まれ。沖浦中学校出身、2000年（平成12）岩国高校卒業。東京学芸大学を経て、2004年に鹿島アントラーズへ加入。鹿島ではJリーグ3連覇などに貢献し、日本代表としてもプレー。2011年アジアカップ優勝メンバー。現役引退後は指導者として、大学、Jリーグ、海外クラブなどで監督・コーチを歴任。2026年より東京学芸大学蹴球部監督。解説や執筆活動の、論理的で深い戦術分析を高く評価されている。著書多数、ベストセラーとなった『PITCH LEVEL』でサッカー本大賞2018受賞。

負けず嫌いと劣等感が、僕を日本代表にした



Daiki Iwamasa

いち学年10人に満たない周防大島の沖浦小・中学校に、サッカー部はありませんでした。「Jリーガーになって W 杯に出場する」という夢も持たず、漠然と「学校の先生になる」と思っていた少年が、いかにして鹿島アントラーズのJリーグ3連覇に貢献し、日本代表選手となって、2011年アジア杯優勝メンバーに名を連ねたのか。東京学芸大学サッカー部監督、解説者、そして教育者として活動する岩政大樹さんの、素顔に迫ります。

――サッカーを始めたのはいつ頃からですか？

僕が小学生の頃にJリーグが発足し、サッカー熱がどんどん高まってきていました。僕には3つ上の兄がいて、いつも大好きな兄を追いかけて、兄に負けたくなくてボールを蹴るようになりました。全校生徒が30人位しかいない島の小学校で、休み時間になると男子はみんな校庭でサッカーをしていましたね。小学4年生の時に、サッカー少年団があることを知って入団したのですが、島のチームでは県大会に出られなかったので、熊毛郡の平生町にある周東FCにも入ることにしました。周東FCは地域の中でもレベルが高く、週4日練習があったんです。学校が終わるとジイちゃんがトラックで平生まで連れて行ってくれて、帰りは仕事を終えた親が迎えに来てくれる。車で片道40分かかるのを2年間続けてくれました。当時から身体は大きくて運動能力もありましたが、神童と呼ばれるような片鱗はないし、周東FCには僕よりも技術的に上手い子がたくさんいました。サッカー選手になろうという夢を持っていたわけでもないのに、僕の好きなことをさせてくれたんです。本当に家族には感謝しかないですね。

――中学校では陸上部!?

沖浦中学校も全校生徒30人位、サッカー部はなく、全員が陸上部でした。周防大島では、中学生駅伝大会が町の伝統行事でもあったので、放課後は基本的に長距離を走っていました。僕は特別足が速かったわけではありませんが、ジャンプ力があったので、走り幅跳びもやらせてもらいました。今思うと、サッカーでしっかり走れる脚力とヘディングの訓練になっていたのかも（笑）。丁度中学生になるタイミングで、島に大島JSCというクラブチームが出来たんです。それで平日は陸上、土日はサッカーという生活になりました。試合に出場するメンバーを集めるのも大変な上に、情報が乏しい島の環境で、練習メニューにしろ戦い方にしろ、どう



島から見れば、岩国は大都会！世界が一気に広がりました

と思うように。家から通えてサッカーができる岩国高校が、候補に挙がりました。当時、岩高サッカー部は全国大会に出るほどの強豪ではありませんでしたが、1つ上の先輩に西本竜洋さん（元湘南ベルマーレ）がいらしたり、急にレベルが上がった時だったんです。周防大島から岩国までは遠いですが、電車で通えないことはない。両親と相談して、学業をおろそかにしないことを条件に、入学することになりました。

――岩国高校での生活は、どのようなものでしたか？

世界が一気に広がりました（笑）。島から見れば、岩国は大都会！　中学までは同級生10人位の中で過ごしていたのに、高校に入ると9クラス360人ほどいるわけですよ。勉強もサッカーも、自分がどれくらいのレベルなのかを、初めて相対的に理解しました。最初は気後れして馴染めませんでしたが、その中で自分の立ち位置を知るようになりました。通学電車は、1本逃すと、次まで1時間くらい待つことになる。大畠駅まで親が車で送迎してくれて、そこから家まで20分。毎日のリズムを正確に守る必要があり、自主練は朝早く行っていました。勉強は往復の電車でするしかなかったので冷やかされたりもしましたが、誰にどう思われようと、限られた時間の中で自分がやれることを具体的に決めて、やり抜く姿勢は崩さないようにしていましたね。

――高校時代に、プロを目指す意識はありましたか？

両親とも教員でしたから、大学の教育学部に進んで中学か高校の数学の先生になり、サッカー部の監督になるという現実的な考えが常にあって、プロになろうとは思っていませんでした。僕の目標は、高校3年生で県選抜に選ばれて、国体に出ること。国体までサッカーを続けるのなら、2年生から理数科に移って、数学を先に進めておくことにしました。小さい頃から続けていたサッカーを、国体出場で完全燃焼して幕を引くと頭に描いていたんです。しかしながら、山口県選抜メンバーに選ばれたにもかかわらず、国体出場目前に足を骨折して、ピッチに立つことが出来ませんでした。この大きな挫折感を抱え、このまま不完全燃焼のままサッカーをやめられるのか。最後にやり切って終わるつもりだったのに、終われなかった。その気持ちをどうするのか。そこで初めて、関東の大学でサッカーを続けたいと思うようになりました。

――そして、東京学芸大学に進学するわけですね？

教員免許を取得するという目的と当時、関東大学リーグ1部にいたこと、センター試験の科目の条件が自分に合っていたことなど、いろいろな条件が重なり、東京学芸大学を選びました。今思うと、これも導かれたような進路でした。在学中の4年間はサッカー部に優秀なメンバーがいて、全国ベスト4にも入り、とても強いチームでした。1年時に関東大学リーグ1部の新人王になれたことから、大学選抜のレベルに到達すればJリーガーになれると、初めてプロを意識し、挑戦することにしたんです。大学選抜のキャプテンとなり、そしてU22日本代表にも選出されてからは、プロになった後にどう活躍するかを考えるようになりました。

――そして、鹿島アントラーズに入団、日本代表でも活躍を。

なぜ鹿島アントラーズに入団したか。

“勝つこと”に挑み続け、考え続ける岩政さんの著書全紹介！



上段左から『サッカー守備解剖図鑑』、『FootBall PRINCIPLES- チームは論理的に作られる -』、『サッカーシステム大全』、『FOOTBALL INTELLIGENCE 相手を見てサッカーをする』、『サッカー鉄壁ディフェンス』、『ウィニング・ストーリー 一流サッカー選手・指導者の自己実現術』、『PITCH LEVEL：例えば攻撃がうまくいかないとき改善する方法』



これからの社会に必要なのは“自分で考え、自分で決める力を育てること”

――今年から、学芸大学サッカー部監督に就任、また株式会社I-WAMASAを設立されて、教育活動に力を入れていきたいそうですね。

これまでの日本の学校教育は、正解が用意されていて、それを当てられるかどうか、そこから外れると評価できないというものだったように思います。でもサッカーは違います。試合中の状況は常に変わります。監督がすべてを指示できるわけではありません。選手がその場で見て、考えて、決断しなければなりません。成功も失敗もありますが、その経験をもとに、次のプレーをまた選び直していく。つまり、正解がない状況で、自分なりに意思決定をする力が必要になります。この思考構造は、これからの教育にもつながると思っています。AIがいろいろな答えを出してくれる時代になっても、最後に何を選ぶのか、どう判断するのかは人間です。自分で考え、自分で決める力を育てることは、これからの社会にも必要なことだと思います。良かったことも、悪かったことも、自分で選んだ結果だと思えれば、人のせいにはしなくなります。若者には、今いる環境の中で、自分は何をしたいのか、何を選ぶのかをしっかりと考えてほしいです。大きな夢を最初から持つ必要はないと思います。夢と現実がかけ離れているほど、具体的に何をすべきかが見えず、何もせずに終わってしまうことも多いでしょう。僕も最初からプロを目指していたわけではありません。ただ、その時々で、自分に開いた扉に向き合い、自分がすべきことを考え、自分で決めて進んできました。そうすれば、思ってもみなかった場所にたどり着くことがあります。僕がサッカーで得てきたものを、社会や教育にどう生かせるのか。そこに取り組んでいきたいと思っています。

一番の理由は、〝勝ち続けるクラブの秘密〟を知りたかったからです。僕は、足が速いわけでも、特別テクニックがあるわけでもない。自分の才能の無さに、強い劣等感を持っていました。それなのに負けず嫌いという厄介な性格なんですよ。絶対に負けたくないから、どうすれば勝てるのかを追究してきました。鹿島では、チームの中で各自責任を分け合い、自分の役割を覚悟をもって全うすることを学び、〝理屈〟と〝情熱〟のバランスを常に意識することが大事だと気づきました。こうして、劣等感のかたまりだった僕が、負けず嫌いの気質に支えられてプロのサッカー選手になることが出来たのです。たくさんの失敗と痛みを経験して、かけがえのないものを得ることができました。「No Pain No Gain」一番好きな言葉です。

――これからの日本サッカー界について、どのようにお考えですか？

2050年までにワールドカップで優勝するという目標を掲げるなら、言葉の定義をもっとはっきりさせる必要があると思っています。たとえば「日本らしさ」とは、「個」とは、「育成」とは何なのか。みんな何となく使っていますが、その意味がふわっとしていることが多い。個の力を高めると言う時、それは1対1で勝つ力なのか、味方と連動して動ける力なのか。そこを曖昧にしたままでは、指導も育成も方向が定まりません。僕は、日本には日本の良さがあると思っています。真面目さ、連係、組織の中での役割理解、周りを見て動く力。そうしたものを、ただ海外の真似ではなく、日本の言葉で定義し直す必要があるのではないかと思います。



本を読む喜びを ふるさとの 子どもたちに

弁護士 **三木 恵美子**さん



Profile

1957年生まれ。川下中学校出身、1976年（昭51）岩国高校卒業。東京大学法学部卒業、1989年弁護士登録、横浜で活動を開始。外国人労働者、生活困窮者、DV被害者、更には子どもの進学支援など、地域に根ざした相談・支援に長く携わる。2003年から『女性の家・サーラー』理事長。2004年度、横浜弁護士会副会長を務める。2024年、岩国市に移動図書館を寄贈。2025年、『外国につながる学生のための奨学金かながわ』を設立。

——岩国ではどのような子ども時代を過ごされましたか？

今から思うと、半世紀以上前の岩国は、ずいぶんおおらかな場所でしたね。小学校も中学校も川下です。子どもたちは地域の中で育っていて、近所の大人もよく見ていましたし、家の事情もそれぞれにありながら、あまり細かいことを聞きすぎない雰囲気がありました。のんびりと、のびのびと育ったように思います。私の両親は、もともと岩国の出身ではありません。父は北関東、母は和歌山の出身です。ふたりは大阪で暮らしていましたが、結婚を反対されて、いわば駆け落ちのように山陽本線の夜行列車に乗りました。本当は博多まで行くつもりだったようですが、途中で切符が足りなくなる。白々と夜が明けた大竹駅あたりで、車掌さんに見つかって「次の駅で降りてください」と言われて降りたのが、岩国駅だったんです。ほぼ無一文でしたから、駅裏の旅館に飛び込んで、掃除や皿洗いなどして働くから住み込ませてほしいとお願いしたそうです。どこの馬の骨とも知れないふたりを引き受けるなんてねぇ（笑）。そこで、少しずつお金を貯めて、川下に移り住んだそうです。ですから、私にとって岩国は、先祖代々の土地というより、両親が偶然降り立ち、そこから生きる場所にした土地です。その後、父はパチンコ店を経営し、母は米軍基地の近くに旅館を建てたんです。

——なかなか特殊な生い立ちなのですね（笑）。

それがね、もともとは和風旅館のつもりで、庭に池を作って鯉を飼い、柳を植えて、客室には松の間・竹の間・梅の間って付けて、さぁオープンとなったら、お客様は米兵ばかり。今でいうラブホテルとして使われるわけですよ。松・竹・梅を慌てて1・2・3、ワン・ツー・スリーに書き換えたって（笑）。用意していた浴衣も、背の高いアメリカの兵隊さんには丈が短すぎて、シーツを切って足したそうです。相手の女性は、もちろん売春を生業としていたワケアリの女性たち。みんながたくましく、助け合い支え合っていました。夜は満室の客室も、昼間は静かですから、お茶やお花の先生にお教室として貸してあげたりしてね、なんておおらかな時代でしょうか。のちに母から聞いた話ですが、川下小学校で保護者の集まりがあった時に、昔住んでいた関西なら初対面でも『ご主人は何をしていらっしゃるの？』と聞かれるのに、誰ひとりそれを聞かなかったそうです。母は「岩国はなんていいところなんだ！私に聞かないということは、娘にも聞いていないだろう。親の職業で子どもを見ないというのは、とてもありがたい！」と感じたそうです。

——岩国高校時代について聞かせてください。

そんな家庭環境でしたから、岩国高校は、とても平和で静かな場所でしたね（笑）。東大を目指すようになったのは、高校2年生の終わりごろです。佐上緑先生という英語の先生がいらっしゃって、とてもよくしていただきました。先生ご自身も苦労して勉強されたそうで、担任でなくても、進学が難しいと思われる生徒を応援してくださっていました。当時は、女子が東大を受けるのは難しいという空気がありました。でも佐上先生は「受けた人が少ないから合格者が少ないのであって、受けてみたらいいじゃないか」と背中を押してくださった。これは大きかったですね。経済的にも、進学は簡単では

Emiko Miki

自動車図書館が岩国を走る!



岩国出身の
イラストレーター・すずきえりなさんの
イラストが全面に描かれた車両。
ナンバープレートは『4646（よむよむ）』

2025年4月から、軽トラックを改造した『自動車図書館』が、岩国市美和町を中心に図書館から離れた地域の学校や福祉施設を巡回しています。これは個人が岩国市に1000万円寄付して実現したもの。横浜で弁護士として活動している三木恵美子さん（昭和51年卒）が寄贈しました。東京大学進学のために上京する18歳までの間、図書館で読書の喜びを知り、読書を習慣付けられたことが、現在の仕事を支えてくれていると語る三木さん。米軍基地に近い川下で、様々な事情を抱えた人たちが行き交う環境に生まれ育ったことも、のちに『困っている人の隣に立つ』弁護士としての姿勢に繋がっているそうです。岩国がふるさとだったからこそといえる、その歩みを伺いました。

> 当時は、女子が東大を受けるのは
> 難しいという空気がありました
> 背中を押してくれたのは佐上緑先生

ありませんでした。家業も、ベトナム戦争の終結や米兵の減少で先行きが見えにくくなっていたのです。そんな時、先生は東大の授業料免除や女子寮のことまで調べてくださいました。東大には経済的に余裕のある家庭の子も多く、授業料免除の枠が余っていることがあるという情報を聞きつけて、在学中の先輩に確認してくださったり。先生がいなければ、東大を目指すという道は開けなかっただろうと思います。

――そして東京大学法学部へ進まれるわけですね。

最初から弁護士になりたかったわけではありません。何かやりたいという明確なものもありませんでした。東大には進学振り分けがあり、後から進路を選ぶことができましたので、とりあえず文科一類を受けて合格したんです。東大に入ったものの、就職のことを考えた時に、男子学生には山ほど求人が来るのに、女子にはなかなか来ないという現実が見えてきました。今になって振り返ると、当時の東大の女子学生は、いわゆる会社が求める「女子社員らしさ」とは違う存在だったのかもしれませんね。お茶を出したり、きちんとお辞儀ができるような女子社員には私も到底なれそうにないので、法学部に行って、弁護士になるしかない、と。また、身近に、社会的に困っている人の弁護をしながら、きちんと所得を得ている弁護士さんがいらっしゃいました。仕事として困っている人の味方になれる、これはすごいことだと思いました。そして司法試験にチャレンジすることにしたのです。



一冊の本との出会いが、よい人生に導かれるきっかけになればと思っています



岩国市中央図書館前での車両お披露目式（2024年11月）　写真提供：日刊いわくに

――横浜で弁護士として歩み始めた理由を教えてください。

まず司法修習の希望地を書く時に、横浜を選びました。東京で、中央にいて活動するよりも地域の中に入って、個別具体的な相談に向き合う方が自分には合っていると思ったからです。当時は、女子修習生を全国どこでも受け入れるという時代ではなく、ある程度大きな庁でないと受け入れが難しい面がありました。山口は修習地ですらありませんでした。そうした中で、横浜に配属されたのです。1980年代後半、プラザ合意後に円高が進み、日本に外国人労働者が増えていきました。横浜ベイブリッジの工事現場などにも、フィリピンや韓国など、さまざまな国の方が働いていました。そういう場所特有の多くの事件がありました。岩国もそうです。米軍基地があり、いろいろな仕事があり、いろいろな家庭がありました。だから、いろいろな子どもがいました。その中で育ったことが、今の仕事の背景にあります。どんな人に対しても、まずはフラットに見る。困っている人を、特別な存在として遠くから見るのではなく、同じ地域で生きている人として見る。そういう感覚は、岩国で育ったからこそ身につき、横浜で生かすことができたのだと思います。

――その岩国への想いから、自動車図書館を寄贈されたそうですね？

本を読むことが大好きでした。しかし自分が読んだ本のうち、親が買い与えてくれたものは、100分の1にもなりません。学校や市の図書館で借りたものばかりです。読書によって私の人生は豊かに広がり、考える力が身についたといっても過言ではありません。私は図書館にも育てられたのです。そのご恩返しの気持ちもあって、寄付をさせていただきました。当初は小・中・高の母校に寄付をしようと思っていたのですが、専門の職員のいる市立図書館に寄付した方が有効活用していただけるだろうという話になりました。職員の方々の発案で、狭い山間部の道路も通りやすい軽トラックによる自動車図書館の制作を決定。トラックに積載出来るのは500冊ですが、車両制作費をできるだけおさえて、合計2577冊の書籍の購入が、職員の方々の熱意と努力で実現したのです。



趣味は日本舞踊に歌舞伎鑑賞。
「推し」は中村七之助さん

2024年11月に完成して、昨年4月から本格運用されています。1冊の本との出会いが、よい人生に導かれるきっかけになればと思っています。

――さて、弁護してとしてどのような問題に向き合ってこられましたか？

外国人労働者の在留資格、労災、差別、医療、DV、家族の問題、子どもの進学…いろいろな相談があります。横浜には、国籍や出身地を越えて助け合うネットワークや、住民票や健康保険のない人たちを診る診療所もありました。私は、横浜の地域の中で、診療所や学校の先生、支援団体の方々とつながりながら、ひとつひとつの事件に向き合ってきました。弁護士一人でできることは限られています。けれど、病院があり、先生がいて、支援団体があり、地域のネットワークがある。そこに弁護士が加わることで、入管に話を上げたり、労災につなげたり、子どもの進学を支えたりできることがあります。

――そうした活動が、外国につながる学生のための奨学金制度の設立となったのですね？

はい。弁護士になって、外国籍の方々の依頼を受けるようになりました。外国につながる子どもたちの場合、親の収入が低かったり、在留資格が安定しないために、進学を諦める高校生とたくさん出会ってきました。永住か定住でないと貸与型の奨学金ですら受けられないんです。また、親の中には、女子の進学は不要であり、むしろ有害という考えの人もいます。そこで、新しく奨学金制度を作ろうと考えました。これまで長い間外国につながる子どもたちを応援してきた人たちが集まって制度を設計し、1億円を拠出して、一般財団法人『外国につながる学生のための奨学金かながわ』という団体を、昨年4月に設立しました。初年度は応募する方が少ないのでは、という心配をしていたのですが、23の学校から26名の応募がありました。この制度を必要としている方がたくさんいることがわかり、今後、この制度を維持継続させていくことが大切だと実感しています。ひとりひとりの努力が報われるように、いわれのない差別によって子どもたちの成長の芽がつぶされないように、力を尽くしたいと思っています。

――岩高の後輩たちに伝えたいことはありますか？

自分がどこから来たのか、どんな家庭に生まれたのかは、自分では選べません。でも、それが必ずしも不利になるとは限りません。私自身、落ち着いた家庭環境で育ったわけではありませんが、それが後に、人の話を聞く力や、困っている人に対する想像力につながったと思っています。岩国は、外から来た家族をよそ者扱いせず、親の職業で子どもを見なかった。そういう土地で育ったことは、私にとって大きな財産です。私が図書館や奨学金に関わるのは、恩返しの気持ちです。大きなことではなくても、自分が受けたものを、次の誰かに渡していく。そういう形で、岩国や社会とつながっていけたらと思っています。

数字を勇気に変え、自信に繋げるコーチング

慶應義塾大学 体育研究所 教授 林 卓史さん

1993年春の甲子園出場、慶應義塾大学、実業団において投手として活躍した後、野球指導者となって球質分析機器『Rapsodo（ラプソード）』を日本で初めて導入。現在は、大学教授としてコーチングとスポーツマネジメントを専門に研究を進めている林卓史さん。「いつか岩国高校で講演して、ものごとを追究する面白さを伝え、スポーツ以外にも応用できる力を養ってもらうことができたら嬉しい」と笑顔で語ってくださいました。





Profile

1975年生まれ。岩国中学校出身、1994年（平成6）岩国高校卒業。慶應義塾大学、日本生命保険、朝日大学教授を経て、慶應義塾大学体育研究所教授。選手時代は投手として東京六大学野球通算21勝。大学日本代表、日米大学野球優勝、社会人野球日本選手権優勝を経験。指導者として朝日大学野球部監督、慶應義塾大学野球部助監督などを務める。侍ジャパンU12投手コーチとして2025年ワールドカップ準優勝。現在は読売巨人軍U15ジュニアユースコーチとしても活動。投手へのコーチングに関する研究で博士号取得。著書に『スピンレート革命』『球速の正体』。



慶大野球部在籍時、東京六大学野球で優勝

――野球を始めたきっかけは？

私の父は、当時野球が強かった岩国商業高校で教員をしていました。小学生の頃、父に連れられて試合の応援に行くうちに、野球に興味を持つようになったのです。岩国中学校の野球部に入ると、指導者が不在の期間が多く、自分たちで練習を組み立てなければいけなかった。このことは、言われるままやるのではなく、何をすればよくなるかを自分で考えてやってみるという、いい経験になったと思います。

――投手として岩国高校野球部へ。

第一印象は、とにかく練習が厳しい、ということでした。「自分より野球に情熱のある大人」に出会えたことはとても嬉しかったのですが、まず練習についていけるだけの体力が身につくまでは、そのありがたさに気づけませんでした。亡くなられた岡村寿さん、友澤邦昭先生、河口雅雄監督。みなさん本当にエネルギーにあふれていました。少し失礼な言い方かもしれませんが、野球部関係者の熱量は、異常なくらいでした。でも、その熱量と部員への愛情があったからこそ、岩国高校の野球部で過ごした時間は、自分にとってかけがえのないものになっています。

――そして念願の甲子園出場も果たしましたね。

高校3年の春に甲子園に出場しました。正直に言うと『出られないと思っていたのが出られた』という感覚でした。当時、中国地区は広島・岡山・山口県の3県から各1校選ばれるということが多かったんです。私たちはベスト4でしたから、普通に考えると出られないだろうと思っていたのに、この年は4校選抜されることになって出場が決まりました。本当にラッキーでした。

日本初！ボールの球質を計測する機器を導入したデータ分析



――進学に慶應義塾大学を選んだ理由は何ですか？

高校2年時の担任で、野球部の顧問でもいらした友澤先生は早稲田大学のご出身だったのですが、保健の授業中に、東京の大学生活がどれだけ楽しかったか、早慶戦がいかに素晴らしかったかを、とても上手に話してくださっていたんです。実際に早慶戦を観に行き、更には先生の早稲田大学でのエピソードを聞くうちに「やっぱり慶應に行きたい」と思うようになりました（笑）。

――大学での野球生活は、どのようなものでしたか？

私の通ったキャンパスは神奈川県藤沢市にあったので、どこか岩国に似たのどかなところがあって、野球と勉学に専念できる環境でした。東京六大学野球で優勝できたことや、日本代表になれたことも良い思い出ですが、一番大きかったのは、本当に良い仲間ができたことです。その仲間と徹夜でミーティングをしたり、本音でぶつかることができた。最高の大学生活だったと思います。



現役時代はピッチャーとして活躍

――同級生には元・読売ジャイアンツ監督の高橋由伸さんがいらっしゃいますね。

大学入学前の高校3年生の時に、初めて一緒に練習をする機会があったのですが、『こんな選手がいるんだな』と驚きました。バットとボールの当たり方が、まるで違うんです。大学生活を通じて、プレーの面で驚かされることばかりでした。『こういう選手がプロ野球の一流になる、そして自分とは違うのだな』と気づかされる日々でもありました。才能や結果を鼻にかけることがない人間性にも驚きました。4年生になる時、自分が主将になりたいと思って密かに多数派工作をしていましたが、「投票するまでもなく、キャプテンは由伸だな」という監督の声に、反対の声がなかったことをよく覚えています（笑）。

――卒業後は社会人野球へ。

プロ野球選手になりたいと思い、日本生命に進みました。福留孝介選手（元MLBシカゴ・カブス）をはじめ、のちにオリンピックで活躍する選手もいて、非常にレベルの高い環境でした。社会人野球日本選手権では、優勝することができましたが、当時は野球をすることが本当に苦しくて、『自分は好きなことを仕事にしてはいけないのだろうか』と思い悩みました。

――そして、選手から指導者に転向されるわけですね？

27歳で日本生命を退社して、慶應野球部のコーチになり、その間に大学院にも行きました。31歳で岐阜県にある朝日大学の監督になり、41歳で慶應野球部の助監督になりました。この時は「野球の研究をして博士号を取る」という目的もあり、『Rapsodo』というボールの球質を計測する機器を日本で初めて導入しました。これによるデータ分析を軸に投手のコーチングを行い、東京六大学リーグ戦連覇やプロ野球選手の育成に携わることができました。野球の研究をしながら、全国の高校・大学・社会人野球チームでアドバイスを行い、こうした経験は『スピンレート革命』、『球速の正体』の2冊の本にまとめています。また、読売ジャイアンツのジュニアユースや侍ジャパンU12の投手コーチを務め、世界大会で準優勝することもできました。将来のトップ選手の育成を目指す、やりがいのある仕事をさせていただいています。

――指導者として、特に心がけていることは何ですか？

まずは「自分のバイアス（思い込み）を自覚すること」です。人間は必ずしも合理的ではありません。様々な偏見を持ち、損を過剰に嫌がったり、現在を大事にし過ぎたり、欠点の方に目が行きやすかったりします。コーチングをする時にも、『自分がズレているかもしれない』『自分はフラットに選手を見ていないかもしれない』と意識するようにしています。これはとても大事だと思います。

もうひとつは「教え過ぎないこと」です。研究室に「事実と本音しか話さない」と書いた紙を貼っています。事実とはデータです。本音とは「さすがにそれはダメでしょ」とか「すごいな」といった率直な反応です。それ以外を伝え始めると、どんどん教え過ぎになってしまいます。部分的なことを言っても、必ずしも上手くなるわけではありません。言い始めると、オーバーコーチング（教え過ぎ）になることもあると思い、自戒しています。



現在、読売巨人軍U15ジュニアユースコーチとしても指導を行う © 読売巨人軍

> **データだけでもない、根性だけでもない、その間にあるものを見つける**

――林さんが目指すコーチングとは？

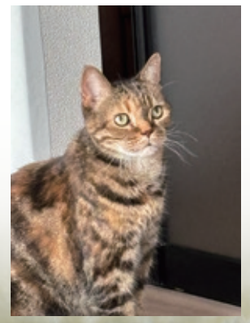
コーチングの研究者として、大谷翔平選手がどう育ったのかにも関心があります。大谷選手の高校時代の監督である佐々木洋さんのコーチングについて注目したキーワードに『きわ』という考え方があります。自主性と共生。数値と感覚。昭和的な熱量と令和的な合理性。デジタルとアナログ。一見すると相反するものの間には、実は重なり合う部分があります。その境目の『きわ』を見つけて、そこを狙ってコーチングすることで、本質をついた指導ができるのではないかと思っています。データだけでもない、根性だけでもない、その間にあるもの。それをどう見つけるか。数字は、人を管理するためだけのものではなく、努力を見つけ、長所を見つけるためにも使えます。そして最後は、数字を「勇気」に変え「自信」に繋げることが大事です。それができるのが優れた指導者であり、私の目指すところです。

――野球以外のことで楽しんでいらっしゃることはありますか？

慶應大学に移って2年目になります。まさか自分が母校の教員になれるとは思っていませんでした。Dream Jobだと思っています。忙しく慣れないこともありますが、母校での教員生活を楽しんでいます。あとは、家で猫（ラン）を飼っています。本当に癒されます。そういえば、昔、錦帯橋の下で出会って岩国の実家で飼っていた猫（京介）のことも思い出すなぁ。

――ふるさと岩国への思いを聞かせてください。

秋から始まる宇野千代さんの朝ドラを、本当に楽しみにしています。「錦帯橋の桜は、日本一の桜です」と仰ったそうですが、私もそう思います。桜の季節に戻ることはなかなかできないのですが、朝ドラで桜のシーンがあることを心から楽しみにしています。岩国高校に通うことが出来て、本当によかった。厳しいながらも自由な校風、野球部関係者の方々の部員に対する愛情と異常な熱量（笑）、走りたいだけ走ることができるあの坂道。思い起こすだけで、胸に熱いものが込み上げてきます。



「何よりの癒し」愛猫のラン

――母校に対する思い、後輩たちに伝えたいことはありますか？

いつか、岩国高校で講演する機会が来ることを妄想しています。その日が来たら、後輩たちに良い話ができるように、充実した人生を生きたい。それくらい、岩国と岩国高校を強く思っているんです。データ分析に重きを置く時代になっても、人を見ることの大切さは変わりません。データの収集とは単なる数字だけではなく、交わした言葉も、生じた感覚もデータの一部として捉え、その人を理解するための手がかりとすべきです。数字は現在地を示してくれますが、そこからどう改善するのか、どう工夫するのか、それを考える力を養ってほしいと思います。野球でも、勉強でも、仕事でも、人と関わる場面では同じだと思います。自分の思い込みに気づき、相手をよく見て、良いところを見つける。そういう姿勢を大切にしてもらえたら嬉しいです。

平成19年卒38歳、同級生と語らう

何年経っても色あせない、あの頃の感覚、変わらない岩国への想い

高校卒業後、それぞれの進学先へ進み、社会人となり、今、東京で暮らしながら仕事や家庭、子育てに向き合う仲間たち。
フットサルやゴルフ、同窓会を通じてつながり続ける関係は、高校時代以上に深まっているといいます。
そんな同級生５人に、学生時代の思い出、キャリアの歩み、そして岩国への想いを語ってもらいました。





> 学校、部活、塾、友だち、恋愛…本当に忙しい高校時代でした（リョーちゃん）

――岩国高校時代は、どんな日々でしたか？

ニシくん（西村） 僕は、サッカー部の活動をしているか、塾に行っているか、という生活でした。ずっと眠いか、お腹が空いているか、という感じで（笑）、夜中にお風呂で寝てしまって、父に叱られたこともありました。でも、とにかく友だちと話すのが楽しくて、そういう時間を大切にしていたように思います。

リョーちゃん（後藤） 中学まではスポーツ全般を頑張っていましたが、高校からはマネージャーになりたいと思ってバスケットボール部に入りました。一方で、絵を描くことも大好きでしたので、芸術大学に進もうと決めてからは、美術部と画塾にも行かせてもらっていました。学校、部活、学習塾と画塾、友だち、恋愛……本当に忙しい高校時代でしたね。

タク（平岡） 僕もサッカー部と塾の思い出が、一番多いです。塾は5人とも芸城学院に通っていて、その時のメンバーが今も繋がっていることを考えると、学校のクラスは違っても、あの時一緒に塾で勉強していて良かったと思います。ニシくんとマーくんとは部活も一緒だったしね。

リョーちゃん 私は大阪芸術大学のグラフィックデザインコースに進みました。初めて同じ志や技術を持つ人たちに囲まれ、すごく絵が上手い人、面白い人、個性の強い人がたくさんいて、刺激的な世界でした。課題やコンペにも全力で取り組み、何日徹夜しても苦にならない。「自分はこういうことが好きなんだ」と実感しました。

タク 僕は第一志望に失敗して、浪人しようかと思ったんです。でも一緒に塾に行っていた仲間がみんな受かって遊び始めているのを見て、羨ましくなり、不本意ながら、後で受かった立命館大学経済学部へ。入ってみると、知り合いがほとんどいなかったんです。そこで、自分でどう輪を広げるかを考え、飲み会や旅行の幹事を自分からやるようにしました。そうすることで人間関係が広がり、調整する力も身についたと思います。

クラっちゃん 野球部を引退してから、案の定、浪人することになりましたが、偏差値40でも人の2倍勉強すればいけるんじゃないかと一念発起、早稲田大学教育学部に合格しました。浪人生活は、今振り返るともしろ良い経験で、勉強や読書をする習慣や知的好奇心など、本来なかったものが身につきまくて岩高に入りました。兄が甲子園ベスト8を経験した世代だったので、それに憧れていました。1年生の時に甲子園に出場することができ、アルプススタンドから応援したことはすごく印象に残っています。当時の野球部は、ほとんど休日がなくて、毎日朝練して、授業を受けて、部活の後にも夜9時くらいまで自主練をして、翌朝4時にはまたグラウンドにいる。そりゃ浪人するよね、というくらい野球漬けの毎日でした（笑）。

――大学時代は、それぞれどんな時間でしたか？

ニシくん 僕は中央大学法学部に進みました。東京に出て、知り合いがゼロの状態から大学生活が始まりましたが、今思うと人間関係が一番広がった時代だったと思います。ゼミやサークル、アルバイトなど、いろいろなコミュニティに顔を出して、それぞれの関係を維持していました。自分のやりたいことや思ったことを言えるようになったのも、この時期だったと思います。



チームで数百億、数千億という規模のお客様を担当することもありました。新人のうちから、社会を動かしているような方々にお会いできたことは、大きな学びでした。朝早くから夜遅くまで働き、プレッシャーの大きな仕事もありましたが、その後、外資系保険会社に転職。更に総合保険代理店を経てから、昨年、保険の会社を独立起業しました。AIと保険を活用して海外展開をしていきたいという志があり、出資してくださる方々にも支えられながら、日々挑戦しています。

マーくん　僕は監査法人トーマツに入り、中小企業やITベンチャーの株式上場、会計監査やコンサルティングで支援する部署に配属されました。さまざまな会社の成長に関わる中で、自分も事業会社側にまわって、会社を一緒に成長させる立場になりたいと思うようになっていきました。7年ほど勤めた後、ベンチャーに転職し、今は旅行×IT×地方創生の会社でCFOとして働いています。途中でニシくんにも声をかけ、今は一緒に仕事をしています。

ニシくん　僕は総合広告会社に就職しました。テレビ、新聞、ウェブ広告、動画制作など、コミュニケーションに関わる仕事をする中で、新規開拓、企画、プランニング、プロジェクト進行、予算管理、効果測定まで、かなり幅広く経験させてもらいました。今は、マーくんの会社でマーケティングに関わっています。まさか東京で同級生と一緒に仕事をすることになるとは思いもしませんでしたが、前職で培った経験が、今の仕事にもつながっています。それと、2025年には息子が生まれましたが、タクやクラっちゃんも同じ1歳児の父なので、同じ思いや情報を共有できて、それもありがたいです。

リョーちゃん　大阪から縁あって東京に出ることになり、大手ビール会社のデザインチームで働くことになりました。その後、現在の社長と出会い、漫画に関わる会社を立ち上げました。今では社員も50人に。幼い頃に漫画家を目指していたこともあり、好きなもの

> まさか東京で同級生と一緒に仕事をすることになるとは思いもしなかった
> （ニシくん）

事について考えるようになりました。友人が法学部で弁護士を目指していたので「じゃあ自分は、経済系で一番難しい会計士を目指そう！」と、公認会計士の勉強を始めました。大学と専門学校のダブルスクールでしたが、大学4年生の時に合格できました。

――社会人になってからのキャリアを教えてください。

タク　三井住友銀行に入行して、ずっと法人営業をしてきました。青山、赤坂、本店営業と経験し、現在はM&Aの仕事をしています。最初のころは、周りを見ると東大出身者が多く、大企業の中で自分がどう生き残るかを考えていました。そこで意識したのが、人と違う営業スタイルをやってみること。大学時代に幹事や企画を自分からやっていたように、仕事でも自分から動き、人がやっていないことに挑戦しました。それがうまくはまり、営業では未達がなく、ストレートで昇格することもできました。今は数兆円規模の案件を担当することもあり、忙しい毎日ですが、やりたい仕事ができています。

クラっちゃん　野村證券に入り、資産家向けの営業、資産設計の仕事からキャリアを始めました。数千万円、数億円というお金の運用に関わり、時には



ニシくん／
西村 雅史
Masafumi Nishimura

麻里布中学校出身、
中央大学法学部卒業。
職業はマーケター 、
1歳男児の父。



タク／
平岡卓也
Takuya Hiraoka

平田中学校出身、
立命館大学
経済学部卒業。
職業は銀行員、
1歳女児の父。

リョーちゃん／
後藤 涼子（旧姓：福永）
Ryoko Goto

美川中学校出身、
大阪芸術大学
デザイン学科卒業。
職業は漫画編集者 、
6歳双子女児の母。

マーくん／
田中將寛
Masahiro Tanaka

平田中学校出身、
大阪大学
経済学部卒業。
職業は IT 会社役員
（財務責任者）、
10 歳男児の父。



クラっちゃん
／**藏田尚哉**
Naoya Kurata

川下中学校出身、
早稲田大学
教育学部卒業。
職業は
保険仲介業経営者、
1歳女児の父。

> 地元の話を東京でする時、
> 岩国のことを誇らしく話せます
> （クラっちゃん）

に戻ってきたような感覚があります。会社の立ち上げ期に結婚し、双子を出産しました。ほとんど休まず仕事を続け、子どもが少し大きくなってからは、自分の絵の創作も再開。現在は夫が単身赴任中で、子育て、仕事、自分の表現活動、会社の次のステージを同時に考える時期にいます。

――ふるさと岩国への想いを聞かせてください。

クラっちゃん　地元の話を東京でする時、岩国のことを誇らしく話せます。錦帯橋があって、海があって、山があって、水もきれいで、仲間がいる。外に出て初めて、地元のありがたさに気づくことがあります。こういう場所で育ったことは、あとから大きな財産になりますね。

ニシくん　東京に暮らすようになって思うのは、岩国に帰ると本当に安心するということですね。その一方で寂れた感を無くすためにも、岩国で感じる温かさは残しつつ発展させていく、もっと人が来やすい住みやすい仕組みを作ることが課題だとも感じます。

リョーちゃん　岩国も、岩国で出会った人たちも、本当に大好きです。ただ、観光地や魅力が点在していて、まだ線になっていない感じもします。錦帯橋、日本酒、レンコン、鮎、山賊、自然。いいものはたくさんあるのに、もう少しわかりやすく伝えられるといいなと思います。映画館やボウリング場が戻ってきてほしい、という気持ちもあります（笑）。

タク　そうですね。岩国には観光資源も食も自然もある。今はそれぞれがバラバラに見えているかもしれませんが、つなげ方次第でもっと面白くなると思います。地元にいる時は当たり前すぎて価値に気づかなかったものも、外に出ると実はすごいものだったとわかります。

マーくん　空港もあり、新幹線も高速道路もあり、海も山もあるのに、まだまだ活かしきれていない気がしますね。岩国に滞在してもらう仕組み、日帰りではなく泊まってもらえる観光の形が作れれば、もっと可能性があると思います。旅行×IT×地方創生の仕事をしているからこそ、なおさらそう感じます。東京で暮らして仕事をしつつ、ふるさと愛が強い僕らだからこそできる提案をして、何か岩国の役に立つことができたらと思っています。

誰かの心に寄り添える歌い手に

歌手 住田愛子さん

麻里布の人気レストラン「鹿鳴館」オーナーシェフの娘。岩国高校在学中に出演した韓国の歌番組『日韓歌王選』で、圧倒的な歌唱力とダンスパフォーマンスが注目され、その時歌った「ギンギラギンにさりげなく」は、現在総再生回数1700万回を超える大きな反響を集めています。2025年に小室哲哉さんがプロデュースするユニット「OVALSISTEM(オーバルシステム)」メインボーカルとして、デビューした住田愛子さんに、これまでの歩みと今後の活動についてお話を伺いました。

——まずは、早稲田大学入学おめでとうございます。

ありがとうございます。2年前、高校2年生の時に小室哲哉さんがプロデュースしてくださることが決まって、上京し転校することになったので、私は岩国高校を卒業しているわけではありません。それでも「同窓生だから」と、今回の会報誌のインタビューにお声掛けいただいたことは、本当に光栄です。父は岩国高校の卒業生ですので、とても喜んでくれています。大学は、音楽活動と勉強を両立させるために、人間科学部のeスクール(通信教育課程)を選択しました。ライブスケジュールに加えてミュージカル出演も決まったので、先のことはわかりませんが、できるだけ単位をとれるように、頑張ります!

——さて、小さい頃から歌手を夢見ていたのですか?

歌が好きになったきっかけは、絢香さんです。母が車の中で絢香さんのCDをよく流していて、自然と口ずさむうちに『私もこんな素敵な歌を歌いたい!』と思うようになりました。「歌を習いたい」と母に伝えると、いろいろと調べてくれて。当時習っていたヴァイオリンの練習を毎日欠かさないことと、学校の成績を落とさないことを条件に、アクターズスクール広島(ASH)に通わせてもらうことになりました。小学5年生の時です。

——ASHといえば、Perfumeをはじめ、多くのアーティストやアイドルを輩出した西日本の名門校ですね。

歌を習いたいという気持ちで入ったのに、ASHは、歌とダンスがセットのカリキュラムです。当時の私はボチャボチャしていて、運動も苦手、ダンスは嫌だと思っていましたが、レッスンを始めてみるとすごく楽しくて、どんどんのめり込みました。そして「歌手になりたい」という明確な夢に変わっていったんです。中学生の時には、ASHで結成されたユニットのオーディションに合格して、週5日通うことになりました。学校が終わるとすぐに飛び出して、母が車で往復3時間の送迎です。うちはレストランもやっていましたから、私よりも母が大変だったと思います。

——東中学校では生徒会長も務められたそうですね。

ASH、学業、生徒会活動を〝三立〟しなければいけなかったので、本当に必死でした。生徒会長として『楽しい学校って何だろう』とずっと考えて、いろいろな企画を発案しては実践しましたし、とにかく全部手抜きしたくなかった。あの時期に頑張れたことは、今の自分の糧になっていると思います。負けず嫌いなんですね(笑)。

——そして、岩国高校へ。

高校に入ってからは、歌手としての活動も本格的に始まりました。オーディション番組『TROT GIRLS JAPAN』のファイナリストになって『日韓歌王選』の出演も決まり、韓国での芸能活動がスタートしたんです。岩国と韓国を行ったり来たりする生活になり、時には1ヶ月まるまる韓国にいることもありました。ありがたいことに学校側にも

Profile

2007年生まれ。東中学校出身、2024年岩国高校2年生の夏に、芸能活動のため上京し転校。2026年、早稲田大学人間科学部入学。10歳でアクターズスクール広島39期生として活動を始める。2023年、オーディション番組『TROT GIRLS JAPAN』に出演し、ファイナリストに選出。さらに韓国で放送された『日韓歌王戦』に日本代表メンバーとして出演。2025年1月、小室哲哉プロデュースのユニットOVAL SISTEMのメインボーカルとしてデビュー。OVAL SISTEMの代表曲「I Surrender」のミュージックビデオは100万回再生を突破。ロックサウンドを軸に、J-POPやダンスミュージックなどを融合させた独自のライブパフォーマンスを展開。2026年秋には東宝ミュージカル『RENT』のモーリーン役での出演が決定。音楽活動に加え舞台にも挑戦し、日本・韓国をはじめ国内外で活躍の場を広げている。





Aiko Sumida

16歳、韓国での歌番組出演が私の大きな転機になりました



小室哲哉さんプロデュースのユニット OVAL SISTEM での活動

ご理解をいただいて、授業に出られない時は友達がノートを取ってくれたりと、たくさん助けてくれました。両親と先生と友達に支えられて、本当に恵まれた環境だったと思います。

――韓国での活動は如何でしたか？

韓国語が全くわからない状態で飛び込んだので、早く覚えなければと猛勉強しました。私が出演した番組では、韓国のテレビ史上初めて、日本人が日本の歌を日本語で歌うという機会をいただいたんです。歴史的な背景もありますし、受け入れてもらえるのか不安もありました。でも放送後にSNSの反響を見ると、日本の音楽や文化に対する好意的なコメントがたくさん寄せられました。ありがたかったですし、音楽は共通の言語なのだと感じる経験でした。今では日常会話は話せるようになりましたし、韓国でのファンの方も増えたので、SNSでは韓国語での発信もしています。高校1年から2年にかけてこの体験は、私の人生を変える大きな起点になりました。

――そこから小室哲哉さんとの出会いに繋がるのですね？

丁度、韓国で出演していた番組が一区切りした時に、事務所の社長から「小室哲哉さんが愛子ちゃんをプロデュースしたいと言ってくださっているんだけど、どうする?」と連絡が入りました。とりあえず、岩国高校は卒業してほしいと願っていた父も、小室哲哉さんの名前を聞くと一転。「東京に行ったほうがいいよ」と言ってくれて、上京と転校を決意しました。高校2年生の夏、文化祭の合唱コンクールが岩高生活の最後になりました。私のクラスはAIさんの『Story』を歌い、「ひとりじゃないから」という歌詞に、クラスのみんなが大号泣。忘れられない思い出です。

――OVAL SISTEM としてデビューされます。

小室さんのスタジオに初めて伺った時はとても緊張しましたが、本当にお優しくて、的確なアドバイスをくださると同時に、私の感想や意見もちゃんと引き出して下さって感激しました。そんな方にプロデュースしてもらえるのですから、頑張らないわけにはいきません。OVAL SISTEMは、演歌歌手として日本レコード大賞新人賞も受賞されたmochilunaこと望月琉叶（もちづきるか）さんがキーボードとラップを担当し、私がメインヴォーカルを務める2人組のユニットです。デビューしてすぐ31公演のツアーも経験し、DMMショートドラマ『地下アイドルの方程式』はOVAL SISTEMをモチーフに制作されるなど、本当にご縁に恵まれました。とはいえ、もっとたくさんの方に住田愛子を知っていただくために、更に自分のパフォーマンス力を上げていかなくてはと思っています。

――今後の活動を教えてください。

OVAL SISTEM としては、10月31日まで『あなたと私の吉祥寺』というタイトルで全11回のライブを行っています。10月15日からは日比谷シアタークリエにて、東宝ミュージカル『RENT』に、モーリーン役で出演します。ブロードウェイでロングランとなり世界中で愛されてきた作品ですので、ミュージカル未経験の私がオーディションに合格した時は本当に驚きました。プレッシャーはありますが、せっかく大きな機会をいただいたので、たくさん吸収し、舞台の上では住田愛子ではなく、モーリーンとして生きられるように頑張りたいです。東京公演に加えて、広島（呉）、博多、名古屋、大阪でも公演があります。機会があれば、劇場に足を運んでくださると嬉しいです。

――アーティストとしての目標は？

以前は『心に届く歌が歌いたい』と強く思っていました。もちろん、たくさん人生経験を積んで、その経験を歌に込められる歌い手になりたいです。でも今は『誰かの心に寄り添える歌を歌いたい』と思っています。聴いてくださる方に少しでも楽しんでいただけたら、笑顔になっていただけたら、ポジティブな気持ちになっていただけたら、と。それには、私自身が楽しまなければ伝わりませんし、今いただいているチャンスをひとつひとつ大切にしながら、がむしゃらに頑張っていきます！そして、大好きな岩国をもっと盛り上げていけるような活動もしたいと思っていますので、どうぞ応援していただけるとありがたいです。





百科辞典を作った 斎藤精輔と 彼を助けた岩国人



出典：『三省堂の百年』（三省堂 1982）

文／佐古利南（としなみ）

1942 年生まれ。1942 年生まれ。麻里布中学校出身、1960 年（昭 35）岩国高校卒。早稲田大学教育学部卒業後、1965 年から山口県立高等学校の社会科教員。部活動では弓道部を指導し、1983 年群馬国体において岩国高校女子弓道部を全国優勝に導く。山口県内の教頭・校長を歴任し、岩国市教育委員会教育委員長を務める。岩国の偉人を顕彰する著書に『近代日本の礎を築いた七人の男たち～岩国セブン・ファーザーズ物語』『いのちに輝きを』『河上肇とふるさと岩国』などがある。

『辞書生活五十年史』

岩国高等学校の前身校、旧制岩国中学校が誕生したのが一八八〇（明治十三）年。その年、斎藤精輔が第一回生として入学しています。斎藤は三省堂にあって英語辞典、国語辞典、漢和辞典などを近代的な辞典を次々と製作、最終的には日本で初めての本格的な百科辞典を作り「近代辞典製作の祖」とも称される人です。

辞典は国民文化形成の上で極めて大切な役割を担っています。しかしながら、彼のなした仕事の重要性に比べ、これまで国内はもとより地元の岩国ですら彼の名が語られることは殆どありませんでした。

今回のこの寄稿の目的は、歴史の闇に消えてしまった斎藤をはじめとして辞書作りに生涯をかけた岩国人の活躍を表舞台に出すことにあります。

斎藤精輔には『辞書生活五十年史』という自叙伝があります。だがこの本は当初、斎藤の一回忌に晴子夫人の手によって謄写印刷され、わずかな知人に配られただけのものでした。亡くなる二か月前に脱稿したこの本を、謄写版刷りにすることは、生前からの本人の希望だったのです。三省堂という出版社に身を置き、あれだけたくさんの辞書を作りながら自分のことを記した自伝は活版印刷していないのです。その真意を推し量ることはできませんが、ごく僅かな知人にしか配られなかったこの本は、やがて一部の識者からその価値が認められ、一九九一（平成三）年に図書出版社が活版印刷し、書店に並ぶようになりました。私が斎藤の存在を知ったのも、この活字本を手にしてからのことでした。

ただ、この本は文語体で記されているために慣れない内は少し読みづらいかもしれません。しかし、その文体に慣れてくると、きわめて悲惨であった少年時代とそれに続く青年期の苦闘、そして多くの岩国出身者の手を借りながら辞書作りに生涯の道を見出していく記述は、読む人をして飽きさせることがありません。

数々の試練を乗り越えた少年時代

その斎藤が生まれたのは、一八六七（明治元）年。彼が誕生した時、父は岩国藩の精義隊に所属し、戊辰戦争で奥州を転戦中でした。彼の精輔という名は

父が所属した精義隊にちなんでいます。
やがて戦争が終わり、父は明治政府に出仕して地租改正の仕事のために三重県に赴任しますが、そこで大規模な地租改正反対一揆に遭遇したのです。一時は故郷の岩国に「ピストル送れ」と打電しなければならないほどの切迫した状況に置かれてしまいます。そうした気苦労が重なったこともあってか、やがて父は精神を病んでしまったのです。
辞職して岩国に帰った父は、座敷牢に入れられ、そこでの生活を余儀なくされました。当時は精神を病んだ人に対する治療法がなく、家の中に牢を作って人目につかないように監視するしか方法がなかったのです。母親はその牢の前で寝起きし、食事の世話など父の面倒を見ていましたが、周囲の人々の祈りむなしく、やがて父は亡くなってしまいました。精輔少年が十四歳の時のことです。
さらに悲劇は続きました。精輔が十六歳の時、母親が錦川に入水し、自ら命を絶つという痛ましい事件が起こったのです。彼は周囲に身寄りが全くいない天涯孤独の身となりました。
しかし、そうした不幸な出来事も彼をひるませたり、卑屈にしたりすることなく、かえっていかなる困難にも耐え抜く不屈の精神を培うこととなりました。そして、そのことが大変な困難を伴う地道な辞書づくりに役立つようになるのはもう少し後になってのことです。

同郷人 渡辺安積を頼って上京

そうした数々の不幸に遭遇した彼に同情する人々の働きかけもあって、一八八六（明治十九）年、十八歳の時に単身上京することになります。上京した時、彼が頼ったのが同郷の渡辺安積でした。渡辺は東京大学で法律を学んだ後、東京日日新聞（毎日新聞の前身）で社説などを書いて大きな評判をとっていました。
さらには英吉利法律学校（中央大学の前身校）を同志と共に創設し、そこで法律の講義なども行っていました。ところが当時出来上がったばかりの法律学校には適切な教科書がなく、渡辺は学生たちに講義の記録をとらせて、それを印刷して教科書にし、自らが立ち上げた錦水堂という書店で販売していたのです。
上京した斎藤精輔はこの錦水堂の店番をしながら、次々と出版される書籍の校正の仕事を任されていたのです。住まいと仕事を得た彼の生活は順調にいくかに見えましたが、またしても不運が襲います。頼っていた渡辺安積が肺病で倒れ、突然この世を去ってしまったのです。一八八七（明治二十）年、渡辺二十九歳の時です。
その後、紹介する人があって毛利家の六男の家庭教師を務めていました。彼の家庭教師ぶりは大変評判が良く、次々と良家の子女の家庭から口がかかっていたのです。そこで新たな居場所と生活費を得た精輔青年は、東京農学校（今の東京大学農学部）の試験にも合格して、そこにも通うという生活をしていました。
そうしたある日、三省堂の創業者亀井忠一が訪ねてきて、計画中の英語辞典の翻訳と編集の手伝いを依頼されたのです。
そのことが、斎藤精輔が辞書作りに生涯をかける第一歩となりました。

「ウエブスター英語辞典」の翻訳

その英語辞典は、米国のウエブスターの英語辞典を翻訳したもので、正式の名称は、「ウエブスター氏新刊大辞書　和訳字彙」となっています。
斎藤のほかに翻訳を担当したのは田中達三郎と、元岩国中学校で英語教師をしていた飯田央ですが、翻訳の中心になったのは、斎藤です。
実は、この時の上京は彼にとって二度目のことでした。最初の上京は、父が亡くなった後で十六歳の時でした。その時は英語教育で定評のあった明治英学校で学んでいたのですが、胃腸を患って志半ばで帰郷を余儀なくされたのです。わずかの期間の学習でしたが、学力は相当に進んでいたようです。帰郷して復学した（旧制）岩国中学校での英語の授業が、幼稚に思えて全く面白くなかったと言っています。また、後年のことになりますが、この時訳したウエブスター英語辞典のほとんどを暗記していたと述べている人もいますから、斎藤青年の英語力、そして記憶力は常人をはるかに超えるレベルに達していたと思われます。
完成した英語辞書は、図版が多く取り入れられるなど、それまでの辞典にない特色を持ち、価格も安く、一般人が容易に手に入れることができるものでした。
しかし、これをどうすれば人々の購買に結びつけることができるかが大きな課題でした。そこで斎藤はこの辞書の訳者を当時有名であった学者の名前を借りることにしたのです。表紙に記載された訳者は、「博言学士イーストレーキ・文学士棚橋一郎共訳」となっています。知名度の高い学者の名を借りて、売れ行きを伸ばそうとの考えからです。もちろん両学者の一部点検、監修を受けてのことですが実際に翻訳した斎藤たちは表に名を出すことなく黒子に徹しました。こうした著名な学者の名前を表に出しての辞書の刊行は、当時としては全く新しい試みでした。
もう一つの問題は販売の手段です。当時は現在のような全国の書店への販売網がありませんでした。したがってどのようにして注文を取り、販売するかが大きな課題でした。

同郷人 中井喜太郎氏の知恵

そこで、その課題解決の知恵を借りるために、当時読売新聞で中心的役割を果たしていた同郷人の中井喜太郎（錦城）を訪ねたのです。この中井は、岩国の東沢瀉の塾で学んだ人ですが、早くからその才を現し、「奇策縦横、名案百出、その智楠公及び孔明を凌ぐ」とまで謳われた大変な知恵者でした。
中井は、すぐさまその斎藤の要求に応えて新聞広告を打ち、その辞書の申込みを新聞社で引き受けることにしたのです。こうした策によって、この辞書は爆発的に売れることになり、三省堂が後々まで「辞書の三省堂」といわれる基盤ができ上がりました。
また斎藤は、辞書作りが自分の性分にあっていることを強く感じ、それからの生涯を辞書作り一事にかけることになったのです。

読売新聞は岩国人でもつ

この辞書の売れ行きに大きな役割を果たした読売新聞ですが、この頃の読売新聞は、まるで岩国人の新聞のようであったと述べた人がいます。一九三五（昭和十五）年に周辺の町が合併して岩国市が誕生した時に、初代岩国市長を務めた永田新之允です。永田は明治時代にこの読売新聞で編集局長まで務めた人でした。その永田の「自叙伝」に、次のような一文があるのです。
「当時、読売新聞社中には、岩国人として先生（中井喜太郎）が主筆たる関係上、同郷の者は先生と私との外に、澤本與市、尾高守、杉原忠吉、後に欧羅巴から帰社した足立荒人（北鷗）を加えると尚ほ四人が居った。読売新聞は、或は岩国人の新聞かのような観もあった。」
中井が務めた主筆とは、記者や編集員を束ねる地位にある人です。岩国のような小藩から、言論分野でもリードする多くの人たちが育っていたのです。
読売新聞の主筆を務めた岩国人は、中井喜太郎だけではありません。足立荒人もその後をうけて主筆となり、更には副社長という重要な地位を務めました。
この足立が主筆であった時に、若き日の河上肇を起用しています。起用に応えた河上は千山万水楼主人のペンネームで「社会主義評論」という社会主義を論評した連載を掲載して大変な評判を呼んでいます。この岩国出身の河上肇は、のちに京都大学教授になり、大正時代に「貧乏物語」を書いて、「貧乏」を初めて学問の対象として取り上げたのです。この本は大変なベストセラーとなり、これを読んで「経済学」を学ぶ学生が急増したといわれています。
なお、この足立は読売新聞副社長を務めた後、求められて郷里に帰り岩国商業高校の前身である岩国町立岩国実業公民学校の初代校長を務めています。

「漢和大字典」と足助直次郎

さて、三省堂で辞書作りを本格化させた斎藤は英和辞典・和英辞典・故事熟語辞典等の袖珍辞書を作成していきます。袖珍辞書とは着物の袖に入る辞書という意味で、今でいえばポケット版辞書とでもいえる携帯に便利な小型の辞書のことです。これがまた爆発的な人気を呼び、三省堂のドル箱になりました。
さらに斎藤の辞書作りの快進撃は続きました。
日本で初めてと言ってよい本格的な漢和辞典「漢和大字典」を完成させたのです。それまでの漢和辞典は、漢字の下にその読み方を付けただけの簡単なものでした。斎藤の考えた漢和辞典は、読み方だけ


漢和大字典


英和辞典

でなく、その漢字の意味や説明を加えたのです。

そして、もう一つのこの辞書の特色は、熟語を収録したことです。ただその熟語の収録法は今の漢和辞典と違います。例えば親字が「上」であれば「太上」「天上」「公上」「奉上」などと、その親字が熟語の終わりにつくように編集されているのです。親字を頭において「上意」「上客」「上京」などとする今とは逆です。これは、漢詩を詠むためには、「脚韻を踏む」と言って同じような響きを持つ言葉を使う必要があったからです。つまりこの辞書は脚韻を探すに便利であり、漢詩を詠む知識人を対象に編集されたものだったのです。当時は漢詩を詠む人が多く、この辞書も大好評の内に版を重ねていきました。

熟語の取り扱い方に現在の辞書との違いがありますが、現在の漢和辞典の基本的スタイルは、この辞典によって完成されました。そのためにこの辞書は「漢和辞典の祖」と呼ばれています。

ところでこの辞書を作るために、斎藤が読売新聞から引き抜いてきたのが、同郷の足助直次郎でした。この足助が中心となって「史上初の漢和辞典」の編集が進められたのです。完成したのが一九〇三（明治三十六）年ですから、計画を立てて七年の歳月を要した大変根気のいる作業でした。


漢和大字典

この足助直次郎の一人息子威男が、「父直次郎は無口でいつも書斎にこもっていた。その書斎を金田一京助や島村抱月が訪ねて来た」と述べています。そのような物静かで、当時の第一級の知識人との交流を持ち、終日部屋に籠っての仕事を苦にしない直次郎の性格は、辞書づくりのような根気のいる作業にはうってつけであったと思われます。

直次郎はその後も三省堂の国語辞典の『辞林』広辞林』の編集に中心的役割を果たします。しかし、彼の名はそれらの辞書の表に明記されることはありませんでした。辞書の前面に大きく名前が載っているのは、当時の著名な国語学者金澤庄三郎です。辞書の権威付けのためとは言え、彼の名はそれらの辞書の表立った場所に明記されることはありませんでした。辞書編集の過程で最も汗をかいたのは、足助直次郎のような人たちだったのです。その彼らが「三省堂編修所編纂」という一語の中にくくられてしまい、歴史の闇の中に消えてしまうのはあまりに寂しく、残念な気がします。

ただ、この『辞林』や『広辞林』の場合、編纂者として表に名を記された金澤は、凡例の最後のところで次のように述べて足助の労を労っています。

「本書の編纂に関しては足助直次郎氏予を助け刻苦精励克く其業を完からしめたり、茲に特記して謝意を表す」

蛇足ながら、この足助も旧制岩国中学校の卒業生です。


百科事典辞典

科辞典編纂作業の文化的意義を十分理解し、いずれの協力者も大変積極的で、当初の予定の項目が膨れ上がり、その記述も精緻を極めて分量が増えたことにありました。さらにまた斎藤氏の編集方針が「至善主義」で貫かれ、「善きものの上にさらに善きものを」と、一巻よりも二巻、二巻よりも三巻と巻が進むにしたがって、より善いものにしていたからでもありました。

ここにその百科辞書の一部の写真（右）があります。挿絵も素晴らしいカラー刷りで、よくも明治時代にこれほどまでの印刷物ができたものと感心してしまいます。より完璧なものを目指そうとした斎藤精輔の意気込みが伝わってきます。

こうして第一巻は一九〇七（明治四十）年に完成し、十一月二十三日にその祝賀園遊会が編集総裁の大隈重信侯爵邸で行われました。その場には、二千数百名の人々が集まって大変な盛況だったと云いますから、この辞典に寄せる人々の期待の大きさが分かります。

三省堂の倒産と百科辞典の中断

しかし、それから後は三省堂は経営面で次第に窮地に立たされていくことになります。百科辞典の編集にあまりにも経費がかかりすぎたためです。このような百科辞典の出版など膨大な日時と経費のかかる事業は本来ならば国家的規模の仕事であり、一書店にできることではなかったのです。

それでも斎藤は三省堂の経済的ひっ迫が度を加えるにつれ、何とかそれを救おうと編集作業を急ぎ、少しでも経費を節減しようとしたのです。そのために日曜祭日を返上して連日編集・校正のために作業を続けていました。

その頃のことです。半年ぶりにあった友人が、外出することもなく半年間も同じ場所で作業を続ける斎藤を見て大変驚いたというエピソードが残されています。

しかし、そうした努力にもかかわらず、一九一二（大正元）年に第六巻を刊行したところで、三省堂は資金に行き詰まり、遂に倒産してしまったのです。

こうした声に何とか応えたいと、斎藤は出版資金確保のために様々なところを駆け回るのですが、膨大な資金不足を補う手立てを見つけることは、なかなかできませんでした。当時の財界の中心にいた渋沢や岩崎財閥などが資金援助をする話もありましたが、うまく話が進展することもなかったのです。

岩国人の手助けで継続した百科辞典出版

そうした苦境にあった斎藤が最後に頼ったのが、同郷の岩国人たちでした。

当時、東京電力の副社長であった新荘吉生を訪ねてそれまでの経過と窮状を話すと、率先して出資を


辞林

「日本百科大辞典」の編集

さて、斎藤精輔は数々の辞典を世に送り出した後、その集大成ともいうべき百科辞典の編集にかかりました。百科辞典とは、科学や医学、動植物や芸術・スポーツ、また社会や家庭生活などあらゆる分野の知識を集めて記録し、これに解説を加えて五十音順に並べた書物のことです。

何かの調べ物をしようとする時に、今ではインターネットを使って簡単に調べることができます。しかし、今から二十年ほど前までは百科辞典が頼りでした。だが、本格的な百科辞典は明治時代にはまだ作られておらず、人々は調べ物をする簡単な手立てを持たなかったのです。先進諸国では既にそうした百科辞典が出版されていて、それぞれの国民の便宜を図っていたのです。そのため百科辞典の有無は、その国民の民度、あるいは文化レベルを図るバロメーターとも言われていました。

当初、斎藤はこの百科辞典は全一巻で計画しますが、準備を進めるに従って第一巻刊行時には本文六巻、索引一巻の全七巻となり、それでも計画どおりにはならず、最終的には全十巻と膨れ上がっていきました。

そうなった理由には、協力する学者たちがこの百も可無之決して御力落し無之様乍蔭祈上候（中略）あとは三分一に過ぎず天下後世の為日本の名誉の為成功信じて疑う所にあらず（下略）

あるいは執筆していたある学者からは次のような書簡が寄せられました。

●（前略）御同情の外無之候就ては先年小生が受取申候原稿料は御返戻申度候間金額御調査の上御一報被下度候（下略）

つまり、「原稿料はいりません。これまで戴いたものもお返しいたします。」と言っているのです。こうした声は一人の学者だけではなく、多くの学者たちから届いた声でした。原稿料はいらないと言い切るほどに、この百科辞典の文化史的意義を理解していて、その中断を惜しみ、ぜひ続けて欲しいと願っていたのです。

こうした声に何とか応えたいと、斎藤は出版資金確保のために様々なところを駆け回るのですが、膨大な資金不足を補う手立てを見つけることは、なかなかできませんでした。当時の財界の中心にいた渋沢や岩崎財閥などが資金援助をする話もありましたが、うまく話が進展することもなかったのです。

岩国人の手助けで継続した百科辞典出版

そうした苦境にあった斎藤が最後に頼ったのが、同郷の岩国人たちでした。

当時、東京電力の副社長であった新荘吉生を訪ねてそれまでの経過と窮状を話すと、率先して出資を

遂行せんが為には素より覚悟の前に候べく（中略）此大事業を中止せしむるまでに日本の社会は冷酷に

●（前略）此空前にして先々絶後というべき大事業至に不堪候（下略）

かわる」と朝野を挙げてその中断を惜しむ声が上がりました。斎藤の下には、激励の手紙が続々と届いたのです。その一部を紹介します。

●（前略）かの辞典出版は世界的大事業にて徒に利のみ追う尋常商売の能くする処にあらず従て目下世の同情は翕然として貴下等の御身に向い居候事と存候間不遠良好なる解決を告げ候事と深く期待致居候更に倍旧の勇気を持って奮闘努力せられん事希望の

承諾し、さらには次のように言って斎藤を励ましたのです。

「予自ら同郷の知人を歴訪し懇嘱する所あらば所要の資金位は同郷人だけにても作り得るなるべし」（私が岩国出身者のもとを訪ねて、協力を依頼して歩こう。そうすれば岩国人だけで必要な経費を集めることができる。）

この言葉に大きな勇気をもらった斎藤は、次に同じ岩国出身の明電舎主の重宗芳水を訪ねました。それまであまり交流がなかったにもかかわらず、重宗は即座に三口（一口千円）の出資を承諾し、「五口までならいつでも出します」と引き受けたのです。さらに小田電気工場の小田庄吉、藤岡市助、そして吉川重吉などの協力を得て、さらに意を強くして資金調達に奔走しました。それからは学者団の応援なども あり資金の調達は順調に進みました。

高額の出資者の一覧表を見ますと、三井や岩崎・鴻池などの当時経済界に重きをなした財界人の名が続きます。その二十数名の中の五名が岩国出身者です。先に述べたように困難を極めた資金集めにめどが立ったのは、この岩国人たちの「同郷の者たちだけでも資金を集めよう」との心意気にありました。いわばこの日本初の百科大辞典の完成は、岩国人の支援なくしてはあり得なかったといっても過言ではないと思います。

予定した七巻以降の辞典は、「三省堂」に変わって「日本百科大辞典刊行会」の名で刊行され、第十巻が刊行されたのは、一九一九（大正八）年のことでした。一八九八（明治三十一）年に構想を立ててから実に二十一年、第一巻が刊行されてから十二年の歳月が流れていました。

さらに付け加えておきたいことがあります。全巻の刊行がなり、販売も順調でいくばくかの利益が上がるようになると、斎藤は資金調達者のところに利息を添えて、すべて返して歩いたのです。

これには出資者も驚いたようです。

「これまで様々な公益事業に出資してきたが、ほとんど返ってくることはなかった。ところが斎藤氏は利子まで添えて返却してきた。こんなことは初めてだ」と。

人の一生は、一事一業である

後年、斎藤は求めに応じて、岩国町立岩国公民実業学校に寄稿し、次のように述べています。

「人の一生は、一事一業である。一事一業に全力を打ち込むといふ事である」。

これは、辞書作り一筋に生涯をかけた斎藤ならではの言葉だと思います。さらに続けて、辞書づくりという地味な作業の中にも「希望もあり、愉快もあり、安心もある」とも述べ、人はあらゆる仕事の中に生きがいを見出すことができるはずだと私たちに語りかけています。

（了）



出典：『三省堂の百年』（三省堂 1982）

令和7～8年度にいただきました寄付金（64名）・広告協賛金（19名）は、1,481,557円
（令和8年9月20日現在）となりました。ご協力に感謝いたします。

寄付者ご芳名

敬称略（卒業年・旧姓）

仲村 映美（昭58・清川）
柏原 保久（昭42）
松岡 勇孝（昭37）
三村 藤明（昭38）
田山 貴子（平元）
濱安 修（平8）
五反田 強（昭36）
八木 昌紀（昭37）
安本 政人（昭39）
河村 節子（昭30・中村）
清川 弥生（昭31・村岡）
西部 和子（昭35・池本）
橘高 靖子（昭40・竹本）
手嶋 良夫（昭41）
木村 克幸（昭44）
中本 尚（昭45）
隆野 美奈子（昭48）
重本 正明（昭49）
江岸 賢（昭52）
藤崎 俊彦（昭52）
藤本 幸二（昭52）
守富 文昭（昭52）
森重 利文（昭54）

安田 忠孝（昭54）
宗正 浩志（昭55）
柏木 靖子（昭58・植田）
高階 順子（昭58・藤井）
名越 一夫（昭58）
山口 聖子（昭58）
渡辺 路子（昭58・玉木）
松田 安司（昭59）
山中 直樹（昭59）
林 卓史（平6）
千田 絵美（平11・川﨑）
藏田 尚哉（平19）
フツハラマサノブ
村本 慎一（昭29）
粟飯原 煦（昭34）
森重 和美（昭43）
谷本 浩二（昭46）
青木 道子（昭48・村田）
片島 文彦（昭48）
兼近 稔（昭48）
廣中 設夫（昭48）
松村 紀（昭48）
綿屋 勝次（昭48）
轉 邦彦（昭50）
豊原 秀史（昭51）
重岡 康弘（昭52）

大山 誠一（昭53）
斎藤 安芸子（昭53・山中）
谷所 陽子（昭53・新本）
寺尾 浩俊（昭56）
沖重 和俊（昭58）
河村 真志（昭58）
木村 和弘（昭58）
清水 聡（昭63）
橋本 祥平（平18）
田中 將寛（平19）
西村 雅史（平19）
平岡 卓也（平19）
匿名
門田 成由（平12）
高橋 賢治（平13）

寄付金は常時受け付けております。
ホームページ【SUPPORT】、
もしくは
東京支部080-4200-0808に
ご連絡ください。
引き続きよろしくお願い申し上げます。

株式会社ウチクラ
代表取締役 内野 豪夫・位江 旧姓：小林
（昭和58年卒） （昭和58年卒）


MCC 松屋産業株式会社
741-0092
岩国市多田 3-112-10
T0827-43-3211
F0827-43-3213
i@028.co.jp
代表取締役 松塚展門 S44卒
テスリックス 格子型手すり
錦帯橋 宇野千代

村中 栄介（昭和61年卒）
三鷹市勤務歴35年＜選管～生活福祉課～資産税課＞
井の頭公園・三鷹の森ジブリ美術館・太宰治文学サロン・山本有三記念館・吉村昭書斎・国立天文台など、見どころ豊富な三鷹へぜひおいでください。

御菓子司 昭和堂
中塚 英吉（昭和58年卒）
靖江（昭和58年卒） 旧姓：藤伊
岩国市岩国1-15-11 ☎0827-41-0347

日本舞踊家 Rido Hanayagi
花柳 梨道
ridopearroad@gmail.com
大田宙樹（平成27年卒）


www.ametsuchi.gift
海野千恵（平成3年卒）

弁護士　**向 宣明**（昭和63年卒）

Mukai Nobuaki

第一東京弁護士会所属
米国ニューヨーク州弁護士登録

日本弁護士会連合会・司法制度調査会商事経済部会長
第一東京弁護士会・総合法律研究所委員長

【 書籍紹介 】

『 独占禁止法　ビジネスに活かす事案からの教訓 』
中央経済社 / 2024年9月刊行
共著　向　宣明（弁護士）
南部利之（元公正取引委員会審査局長）

桃尾・松尾・難波法律事務所

東京都千代田区麹町4－1 麹町ダイヤモンドビル
Tel : 03 - 3288 - 2080
Email : mukai@mmn-law.gr.jp
https : //www.mmn-law.gr.jp



四国 88 屋
はちはちや



50名程度貸切OK

丸の内本店
東京都千代田区丸の内 1-4-1
丸の内永楽ビルディング B1F
☎03-6273-4560

大手町店
東京都千代田区大手町 1-1-3
大手センタービル B1F
☎03-6551-9888

せとうち旬彩館
郷土・せとうち料理
かおりひめ 香琳

香川・愛媛の
工芸品・雑貨ショップ
東京都港区新橋 2-19-10 新橋マリンビル 2F
（香川・愛媛せとうち旬彩館）
☎03-5537-2684

SETOUCHI SHIMANAMI LEADING

株式会社 瀬戸内しまなみリーディング
代表取締役社長　**宮本 敬治**（昭和 54 年卒）
愛媛県今治市東鳥生町 5 丁目 15 番地

円満な相続・遺言・墓じまいは
行政書士 アルファ法務事務所
代表　高橋　まり



03-6657-5975
土・日・祝日含む
11:00～17:00（ご予約制）
墨田区両国4-19-6-101
緑1丁目交差点
←ホームページ　メールフォーム→



オールカラー /A5 判 /88 頁
定価（本体 1,200 円＋税）
ISBN　978-4-8090-3190-8 C0077 ¥1200E

あなたのくらしに「ちょっとプラス」な会社
株式会社 WA・ON
「食べることは生きること」
フェーズフリー（防災）、薬膳、食育…
「いつも」も「もしも」も生き抜くチカラを

手軽に衛生的に美味しく作れる
主食、副菜、主菜、汁物、飲み物、スイーツ…
考え方の基本となるフェーズフリーレシピを掲載
東京法令出版より５刷重版出来 !!!

講座、講演、ワークショップ、イベント等の講師
レシピ提案、メニュー開発、既存食材の活用相談など
「食」に関するご相談承ります！

NIPPON FOOD SHIFT
PHASE FREE Action Partner

S52 卒業　飯田和子（旧姓 岡田）

心から心へ
橋わたし

五橋

代表取締役 酒井秀希（昭和60年卒）
酒井酒造株式会社　山口県岩国市中津町1-1-31　TEL0827-21-2177
https://www.gokyo-sake.co.jp/　お酒は20歳になってから。

あなたを仕事でハナマルに
ハナマルキャリア総合研究所



草思社
2025年発刊

代表　**上田 晶美**（昭和54年卒）

日本初のキャリアコンサルタント。
創業33年。「若者採用支援」「女性活躍」「ハラスメント対策」等、各種企業研修を実施しています。著書23冊。
日経新聞『就活考』連載中12年。

http : // hanamaru-souken.com
ueda@hanamaru-souken.com

至誠にして動かざるものは、未だこれ有らざるなり

岩国高校同窓生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。
東京・永田町にて弁護士をしております、前野元国と申します。
故郷に少しでも貢献したいという思いから、岩国での案件にも対応しております。
皆様の抱える法的な課題に寄り添い、最善の解決を目指して尽力してまいります。
些細なことでも、どうぞお気軽にご相談ください。

弁護士（第一東京弁護士会所属）
前野 元国（平成21年卒）

専門分野 ： 不動産法務・企業法務・相続法務

徳恒法律事務所・外国法共同事業

〒100-0014
東京都千代田区永田町2-17-17
アイオス永田町610
TEL : 03-6265-6470
Email : maeno@motokunilaw.com

HIKARI SOGOH LAW OFFICES

ひかり総合法律事務所

https//www.hikari-law.com

弁護士

武田 昇平
（平成11年卒）
takeda@hikari-law.com

〒105-0001
東京都港区虎ノ門2－3－22 第一秋山ビルディング6階
TEL：03-3597-8701





光井純 アンド アソシエーツ 建築設計事務所 株式会社
ペリ クラーク アンド パートナーズ ジャパン 株式会社
代表取締役　光井純（昭和48年卒）

〒141-0031 東京都品川区西五反田5-2-4レキシントン・プラザ西五反田
TEL.03 3491 0419　https://www.jma.co.jp/
東京 / 大阪 / 岩国

jma jun mitsui & associates inc. architects

信頼のおつきあい
株式会社 東洋地所

代表取締役　**長島 友愛**（平成5年卒）
取締役会長　**西村 栄時**（昭和34年卒）

山口県岩国市山手町１丁目１－１４
Tel : 0827 - 24 - 2468
https : //www.toyojisyo.co.jp/



OFFICE TT 株式会社

Thinking Together

竹山 龍伸

代表取締役社長

昭和58年卒

（元グローバルカンパニー日本地域代表）

経営事業戦略コンサルタント

東京都目黒区洗足2-26-16 | 080-6560-4274 | takeryu109@gmail.com

山口県立岩国高等学校同窓会
東京支部70周年おめでとうございます!

岩国ちよ散歩

日本酒のくに、いわくに
つまんでちょんまげ
Tsuman de Chonmage

センザキッチン
Senzakitchen

株式会社BRIDGE 代表取締役／クリエイティブディレクター
二藤 正和

BRIDGE

IWAKO

Iwakuni High School Alumni Association